

令和 4 年度
研究調査報告

【概要版】



四日市市教育委員会教育支援課

第415集 森本 康太 長田 淳

音声文字化アプリによって実現される学びの可能性

— 道具と学習の関係性を通して —

第416集 野中 純子 前田 怜子 上野 藤子 芦澤 洋美

校内ふれあい教室での支援についての一考察

— 学習を通じての自己効力感に焦点をあてて —

1 研究の目的

教育の新しい道具としての ICT，特に音声文字化アプリによって実現される学びの可能性について示す。

2 研究の内容と方法

(1) 道具の定義

教育における道具に関連する語として「校具」「教具」「教材」「教育メディア」の概念の変遷を明らかにした。その結果，本研究では「授業のなかで用いられ，教育内容そのものではなく，教育方法として学習状況を具体化するもの」と定義づけた。

(2) 道具と学習の関係性

現在までに活用された道具を主な使用者と実現された学習状況によって分類・整理すると，社会で使われていた道具が授業で活用されることで新しい学習状況が実現された例が多く見られた。新しい道具が生まれて社会で成熟し，教育の場で利用されることが一般的であるという道具と学習の関係性から，音声文字化アプリが道具として活用できる段階にあることを明らかにした。

(3) 音声文字化アプリによって実現される学習状況の想定と実践

本研究では，音声文字化アプリによって実現される学習状況を以下の 3 つに大別した。

- ① 相手が話した内容を文字として確認する。
- ② 自分が話した内容を文字として認知する。
- ③ 自分が考えたことを話して文字に表す。

それぞれが聞く・話す・書く学習活動に関連する。これらを意識した学習活動を設定し，小学校 5 年生国語科「話すこと」を中心に実践した。

(4) 実践分析

「話す力の自己評価アンケート」の回答割合分布を事前と事後で比較分析した。事後に実施した「音声文字化アプリの活用に関するアンケート」は各項目の回答割合分布をもとに分析した。また，児童による音声文字化アプリを使用した感想と使用したい場面についての記述回答と，本研究に関わった教員による記述回答の結果も加えて分析した。

3 研究のまとめ

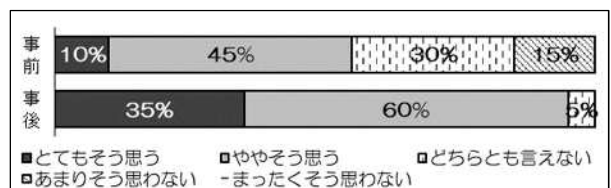
(1) 音声文字化アプリによって実現される学びの可能性

第一に，全ての子どもが意欲的に学習できるという可能性である。自分の話した言葉を即時に文字として認知できたことが，話す意欲を向上させた。また，聞いている内容が文字として表示されていくことが，聞く意欲も向上させた。

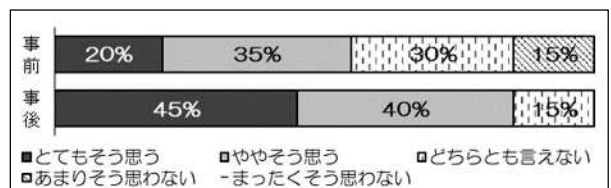
第二に，話した内容の文字を媒介として過去の自分や友達と対話できるという可能性である。前時で話した言葉が画面上に残っていることで，過去の自分と対話して学びをつなぐことができた。友達との対話については，話した内容が文字として表示されていることにより，話し方を具体的にアドバイスすることができた。

第三に，言葉にこだわって深く考えることができるという可能性である。「話したい事にぴったりの言葉を選んで使うことができる」【図 1】と「聞き手の印象に残るように【話の内容】を工夫できる」【図 2】の肯定的回答の割合がそれぞれ 40 ポイント上昇した。音声文字化アプリによって話した言葉を意識できたことが大きく関与していると考えられる。

以上のことから，音声文字化アプリを活用することで，全ての子どもが意欲的に学習し，文字を媒介として過去の自分や友達と対話し，言葉にこだわって深く考えるといった学びにつながる可能性があるといえる。



【図 1】「話したい事にぴったりの言葉を選んで使うことができる」の割合分布



【図 2】「聞き手の印象に残るように【話の内容】を工夫できる」の割合分布

1 研究の目的

校内ふれあい教室（登校はできるが教室に入りづらいという生徒を対象に、学校内の専用の教室と専任の教員を置く）を利用する生徒に対する支援において、生徒自身が専任の教員とともに、学習に対する具体的な計画の立案・実行・振り返りを通じた学習活動を行い、教員が自律性支援的に関わることで、生徒の自己効力感につながるかを検証する。

2 研究の内容と方法

(1) 研究対象

校内ふれあい教室を利用する生徒 15 人を対象とした。

(2) 研究の内容

研究対象校で、校内ふれあい教室を利用する生徒に、専任の教員とともに、学習に対する具体的な計画の立案・実行・振り返りを通じた学習活動を行い、教員が自律性支援的に関わる。実践の前後に、校内ふれあい教室に登校する生徒に対し実施に関わる調査を行い、その結果の比較により、自己効力感が高まるかについて検証した。

(3) 検証の方法

本研究では、自己効力感を、「自律性支援の認知」、「学業的効力感」、「社会的効力感」、「教科の学習内容に対する興味」とし、調査を行った。実践前後の調査により、生徒の自己効力感の変化を検証するとともに、専任の教員からの聞き取りやアンケート、生徒の記述による振り返りから、生徒の学習の様子や過ごし方に変化があるかを調査した。

(4) 結果

自律性支援の認知は、事前での調査の結果から、教師の自律性支援を認知している生徒が多かった。事後の調査では、大きな変化は見られなかった。学業的効力感、社会的効力感ともに、7人の得点が上昇し、教科の学習内容に対する興味については、6人の得点が上昇した。

3 研究のまとめ

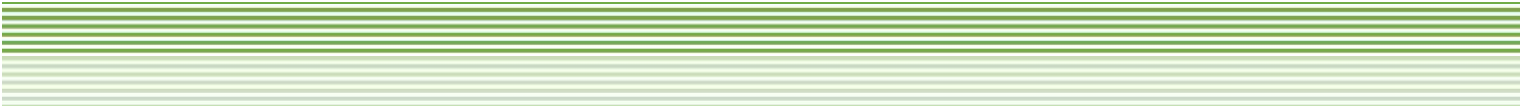
(1) 生徒の自己効力感

調査結果から、校内ふれあい教室は、学習の機会が保障された場所であること、また、自律性支援の認知された環境で、褒められたり認められたりすることで安心して過ごすことのできる学校内の居場所として機能していることが読み取れた。生徒は、ワークシートを通じた学習支援の中で、学習内容を理解したり、問題を正解したりすることで、自信となり「学習をうまく進めていける」と実感し、学業的な自己効力感の上昇につながったと考えられる。「教室の授業内容があまり分からず不安だったが、分からなかったところをつめて取り組み少し自信がついた」と回答しており、生徒が自分なりに頑張ったことが自信につながったと読み取ることができた。また、教師の励ましの言葉は、生徒の学習の支えになっていることがわかった。

専任の教員が自律性支援を行うことで、よりよい信頼関係のうえで、生徒はエネルギーを蓄え、新しいことに挑戦しようとして行動できたのではないかと考える。専任の教員は「学習の内容はすぐに成績に反映するものではない。どの生徒・指導者も学習支援に焦点を当てていたが学習以外でもとても前向きに行動することができるようになった」と回答しており、肯定的な変化が見られた。

(2) ワークシートの意義

生徒の登校ペースも様々である校内ふれあい教室において、ワークシートという一つのツールを使用し、生徒が専任の教員とともに現状を把握したうえで学習計画の立案・実行・振り返りを行ったことは、生徒に学習への自信と今後の見通しをもたせ、対話を通じて教員と共有する時間を確保することにつながった。また、学習が計画通り行われたとしても、行われなかったとしても、自己の学習を見直す機会となり、今後の学習に見通しをもつために有効な振り返りのツールになったと考えられる。



令和4年度研究調査報告【概要版】

発行 令和5年3月

発行者 四日市市教育委員会教育支援課

〒510-0085 三重県四日市市諏訪町2番2号

電話番号 / 059-354-8149 FAX / 059-359-0280

E-mail / kyouikushien@city.yokkaichi.mie.jp

